

2020年9月20日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「麦とぶどうにまさる喜び」詩編90編・4編・34編・48編

主任牧師 加藤 誠

◆九十編「あなたは人を塵に返し、『人の子よ、帰れ』と仰せになります」(三節)、「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができますように」(一二節)。

「生涯の日を正しく数える知恵」とは、どのような知恵のことでしょうか。それは「私たちの命は、自分の手の中にあるのではなく、神さまの手の中にあることを知る知恵」です。新約聖書のヤコブの手紙はこう語っています(4:13以下)。

「今日か明日、これこれの町へ行って一年間滞在し、商売をして金儲けをしようと言う人たち。あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、『主の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう』と言うべきです」と。私たちの人生は、自分の計画、やりたいことを押し通すキャンパスではありません。「神さま、あなたの御心ならばさせてください。けれども、あなたの御心でないならば、取り上げてください」と、神さまに御心を尋ねながら線を描き、色を塗っていくキャンパスです。そこに聖書の教える「生涯の日を正しく数える知恵」があります。

◆四編「人々は麦とぶどうを豊かに取り入れて喜びます。それにもまさる喜びを／わたしの心にお与えください。平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。主よ、あなただけが、確かに／わたしをここに住まわせてくださるのです。」(八節、九節)

あるアンケートで「どんな時に一番幸せを感じますか?」という質問に対する答えで多かったのは、「欲しいものを手に入れたとき」「財布にお金がたくさん入っている時」「おいしい料理を食べたとき」というものだったそうです。なるほどと思う答えばかりですが、人間はなんと欲深い存在なのだろうかと考えさせられます。

また別のアンケートで「どんな時に小さな幸せを感じますか?」という質問には、「夜ぐっすり眠れた時」「忘れていた紙幣がポケットから出てきた時」「洗いたてのシーツで寝たとき」「誰かを笑顔にできたとき」「寝ている赤ちゃんを見る時」「友達からの手紙」「母の手料理」など、心が和やかにされる答えが並んでいました。いずれもお金では買えない「小さな幸せ」です。いや、これらの「小さな幸せ」は、私たちがお金やモノに心奪われていると見つけられないもの、感じられないものではないでしょうか。お金は大切なものですが、第一のものではない。お金よりも大切なものがあるのです。

「麦とぶどうの豊かな収穫」は、多くの人びとの命を支え、天候が悪く農作物が不作だと、多くの人命が危機に瀕します。ですから「麦とぶどうの豊かな収穫は人々の大きな喜び」なのです。ただし、その豊かな収穫が目的化する時、力ある者

が力弱い者から奪う収奪が起こり、生産性が低いと見なされた人たちは「お前は使えない！」という言葉と共に、社会の片隅に追いやられていきます。「豊かな収穫＝富」は、私たちの心を貧しくする悪魔的な力を持っています。その意味で「豊かな収穫」は大切ですが、人が生きる時に大切な「第一の喜び」ではありません。そこをはき違えてはならないのです。

では、「麦とぶどうにまさる喜び」、人が生きる時に大切な「第一の喜び」とはどのような喜びなのでしょう。今朝の四つの詩編が共通して指し示しているのは、「神の豊かな恵みに信頼して、神に従い、神と共に生きる喜び」です。「神さま、新しい一日をありがとうございます！」と感謝し、「神さま、今日、隣り人と分かち合う優しさを与えてください！」と神さまの前に心低くして一日を始めていくとき、その一日は「小さな幸せ」を見出だし、「ぶどうと麦にまさる喜び」が与えられる一日に変えられていくのではないのでしょうか。

◆三四編「味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は」(九節)、「子らよ、わたしに聞き従え。主を畏れることを教えよう」(一二節)。

◆四八編「後の代に語り伝えよ／この神は世々限りなくわたしたちの神／死を越えて、わたしたちを導いて行かれる、と」(一四節、一五節)。

私たちが愛しておられる神は「死を越えて導く方」であると、詩編四八編は告白します。私たちは必ず死を迎えます。そこに例外はありません。ただ、心臓がとまったあとどうなるのか。死の向こう側に何があるのかを誰も知りません。けれども、イエス・キリストはその十字架と復活を通して、私たちの死がすべての終わりではないこと。どんな暗闇にも、神さまの光は輝いていて、一人ひとりが復活の希望につながられていることを教えてくださいました。ここに私たちに与えられている、最も深い幸いがあると思います。

大井バプテスト教会には、神さまと共に生きる信仰の幸いを見せてくださっている人生の先輩たちがたくさん与えられていることを感謝します。神さまから与えられた人生は、それぞれユニークなものです。私たちはつい自分を他人と比べてしまいますが、一人ひとりの人生は誰かと取り替えることはできません。けれども確かなことは、日々の喜びだけでなく、悲しみや苦難の中にも主イエスが共に歩んでくださり、一人ひとりの重荷を背負ってくださっていること。今は、答えや意味が見えないことがあったとしても、それぞれが経験している悲しみや苦難はすべて神さまの希望の光のもとで、「神さま、そうだったのですね、ありがとうございます！」という感謝と賛美に変えられていくということです。

人が生きる時になくてならない「第一の喜び」。神に感謝し、恐れ、隣り人を大切に愛する愛を、今日も聖書からいただいきたいのです。